森 茉莉・エッセーⅠ

父の帽子

新潮社版

森 茉莉・エッセーⅠ

父の帽子

新潮社版

森茉莉エッセー I
父の帽子
一九八二年二月二〇日発行
一九八四年五月 五 日五刷
著 者 森 茉莉
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部〇三―二六六―五一一一
編集部〇三―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂
定価 千六百円

© 1982 Marie Mori
Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-644201-9 C0395

森茉莉・エッセーI　＊父の帽子＊目次

父の帽子……7
父の帽子 9　幼い日々 11　二人の天使 35　注射 37　「半日」 40　明舟町の家 43　刺 54　父鷗外の思い出 60　父の死と母、その周囲 62　父と私 71　晩年の母 73　街の故郷 76　夢 79　空と花と生活 97

靴の音……105
細い葉蔭への愛情 107　哀しみのある日々 111　森鷗外 118　降誕祭(クリスマス)の夜 126　明治の新劇と私 164　「女ひと」感想 173　バナナ・ボオト、ハヒチの歌 175　コペリア・「巴里」 176　録音 178

濃灰色の魚……181
鉄のマリア 183　燿めく秋 185　燃える硝子の刀 187　ジェームス・デ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ィーンの暗鬱188　下絵191　障子の中194　雛の眼196　失った手紙197
ウオッカ201　「フジキチン」203　荷風と原稿207　私の離婚とその後
の日々211　二人の悪妻221

未刊行エッセー

Ⅰ
父の底のもの233　風呂桶の湯と体238　重い頁（ページ）——万暦赤絵241　思
った事248　人間の「よさ」を持った父251
Ⅱ
六代目菊五郎と焚火257　段七と春吉259　新劇界の宝石六つ（昭
和八年）264　松竹劇壇への言葉とその収穫の一つ『弥次喜多』266
小劇場の「復活」270　歌舞伎芝居の宝石273　演舞場の曾我廼家279
芝居の味282　五代目追善口上の舞台稽古284　エノケンの森の石

松287　佳作、地獄変と大村290　歌舞伎劇と青年俳優達292

＊

黄金の針（森　茉莉）――室生犀星……295

〔本書の装画は、一八七五年にWalter Craneが"Sleeping Beauty"と題しデザインした図柄を富沢千砂子が描き起し、彩色したものである〕

森茉莉・エッセーI

父の帽子

父の帽子

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

父の帽子

小さな怒り

私の父は頭が大きかったので、普通の人の帽子を見馴れた眼で父の帽子を見ると平たく、横に大きい感じがして独特で、あった。私は父についてよく帽子屋に入った。

番頭が出して来る帽子はどれも父の頭には小さかった。「もう少し上等の分を見せてくれ」と父が言った。「上等の分」という言葉は番頭には直ぐには分らなかったが、意味が解ると、番頭の顔には薄ら笑いが浮ぶのであった。奥から出して来る帽子も、父の頭には嵌らなかった。番頭達は人並外れて大きな頭の人を、笑いを耐えたような顔で、眺めた。灰色の単衣を着て、薄茶の献上を下手に結び、太いステッキをついている父はカイゼル皇帝が浴衣を着たというようで、奇妙であったし、態度や言葉もふつうの人と少し違っているので、彼等にはどんな人なのか全く解らなかった。それで彼等は田舎から出て来たお爺さんだろうと定めてしまうらしかった。父はそういう番頭達に対していつも深く腹を立てていた。そうしてその怒りは母なぞが不思議に思う程ひどかった。(父は普通、人がどうでもいいと思うような小さな事に、深く腹を立てる人であった。相手は電車の車掌、精養軒のボオイ、車夫、店員なぞで、父が怒るのは彼等が父を田舎のお爺さんのように扱う時、又は料理の名を英語で言って解るまいという顔をする時なぞで、あった。父は直ぐに正しい英語で命じ直したり、又或時には、目的地に着かないのに俥を下りて歩いたりした)。

そういう風にして何軒も帽子屋を廻って歩いて、父は自分の帽子を見つけるのであった。

私は今でも、その平たくて横に大きい父の帽子が眼に浮んで来て、懐しくてならない時がある。父が死んだあとで一度、私は父の帽子に会ったような気がしたことがあった。夫の友達の一人に父のような所のある人があり、その人の頭は父位大きいので、脱いで置いてある帽子を見ると、私はその帽子に父を感じた。鉄色に同じリボンの帽子、であった。(その人は私と息子との共通の、尊敬する人物の一人である)その帽子を見てからあと、私は父の帽子に会っていない。

大きな怒り

私は幼い時からそばにいて父を見ていて、私には父が、学問や芸術に対して、山の頂を極める人のような、きれいな熱情を持っていた人のように、見えた。私は時々父に解らない字や、仮名遣いをきいたが、そういう時私はいつもは大好きな父が、いくらか嫌いになるのであった。それは父の字や仮名遣いにたいする、異様に烈しい心が感じられて、それがうるさく思われたからで、あった。私に教えて呉れようとしている優しいようすの中にも、父のまるで怒ってでもいるような烈しい心がひそめられていて、それが私にうるさい感じをあたえたので、あった。父は眼に見えない「嘘字」や「仮名遣いの間違い」という敵に向って怒っていて、それが幼い私にも伝わるので、あった。「パッパ、もういいわ」そう言って私が本を持って行こうとすると、父は、「まあ、待て、待て」と言って止めるので、あった。そんな時の記憶が父の想い出の中に混って、私の頭に強く残っていたのだろう。十七になって夫と欧羅巴を歩いた時、私はいろいろな場所で「父の心」に会ったように、思った。シルレル、ゲエテ、ストリンドベルヒ、なぞの字が鈍い金色に光っている、伯林の本屋の薄闇の中に立っているような時、そんな時なぞに私は「父の心」が其処にいるように、思った。私は父の、もっと極めたくて極められずに死んだ、学問への「心」が、暗い本棚のあたりに漂っているのを感じ、稚い頭の中で、父の一生を考えてみるのだった。烈しくて、さかんな、そのために寂しかった父の一生を、私は想ってみるので、あった。ミュンヘンの町で、家にあった花と同じな花を見たり（父は独逸から花の種を持って帰って家の庭に植えていた）町の角で、父によく似た独逸人を見たりする時、父の懐しさは花の匂いのように私の心をかすめたが、私がひどく切なくなるのはそういう、父の心に会ったような気がする時で、あった。

私は、帽子を買う時の父のような、つまらない事に怒る父が大好きであるのと同じように、私に仮名遣いを教えた時のようにして、議論をしたり、反駁する文章を書いたりした、怒っているような父を、いつからかひどく好きになって来ている。

森の中で、たてがみを立てて咆哮する一匹の獅子が私の眼には見えていて、父の肖像の眼の中にその獅子がいるのを見る時、私はどれだけ父を好きだか知れない自分を意識するのがいつものことで、あった。

幼い日々

小さい時の思い出を書こうとすると何から書いていいか分らなくて、ただ一時に或る一つの世界が心の底に、拡がってくる。

冬はしんとした木立に囲まれ、夏は烈しい雨のような蟬の声に包まれた千駄木町の家。青い木の葉が、空を暗く蔽っていた奥座敷、細い指で私の髪を分け、リボンを結んで呉れる母。上野広小路の四つ角。そこには畳まれては又開いてゆく扇の玩具の、赤や金や、紫がキラキラと、陽の光にはためいていた。青葉を後にした鏡の、暗い透明の中に浮き出していた母の顔。衛戍病院の廊下、陸軍省の門から医務局までの夏木立。秋も終りに近い灯ともし頃の仲見世の雑沓、ジンタの響きにまじって流れていた悲しいような歌の声。桜田本郷町の雪の夕暮れ。天金の奥座敷。それらは皆明治の中に、あった。

上野の山が遠く影絵のように、浮んで来る。煤煙の色に暮れた空、木々の梢。雨や風にさらされて古びた精養軒、博物館、音楽学校、美術館、低い茶店なぞがその間々にちらちらと、見えて来る。亡霊の声のように湧き起ってくる広小路の騒音……

もう夜になった広小路には黄色い灯が点々と輝き、地面を揺するような電車の響きの間を縫って夕刊売りの鈴の音、人力車の喇叭の音なぞが、きこえる。楽隊の音があたり一杯に鳴って、悲しげな歌の節が流れていることも、あった。人の流れの隙間から見える勧工場の内部は、昼間のように明るくて、その奥はなにかの歓楽境のように深く見え、人人の頭がうごめいていた。肩掛けの黒駝鳥の羽が、青白い頬に映っている母の横顔を見上げると、それが直ぐ解ったように顔をうつむけ、母は私の顔を見た。

「まりちゃん、勧工場へ入るかい……？」

いろいろな玩具、紅い砂糖菓子なぞを入れた硝子の箱や金紙、銀紙、南京玉がキラキラと光り、サアベルや背嚢、紅と白の羽飾りをつけた軍人の帽子、喇叭なぞが下っている、店の前に立止った私が、絵草紙、人形なぞを指さすと、母はひいていた手を離し、帯の間から蟇口を出して銀のパチンを開け、銀貨やお札なぞを出すのだった。

なま温い場内から外へ出ると、賑やかな電燈の光りや足下に響く電車の軋み、人力車なぞの往き交いも前よりはいくらか淋しくなったように、思われた。上野の森はただ真

黒く遠く見え、暗い山の影が大きく、聳えている。母は私の手をひいて広小路を抜けるとその山の方へ向って、歩いてゆく。私は母の手を握った手を強くし、少し足早になった母に追いつこうとして、小さな足で走るように歩いた。母の手は少し冷たくて、指のダイヤモンドが硬く痛い。山の下に近づくと私はようやく「ああ、俥に乗るのだな」と思う。山の勾配の尽きる所には五六台の人力車が、客待ちをしていた。汚い膝掛けを頭から被り、それで体をくるんで蹴込みに腰かけ、寒そうに股引を揃えているのが暗い中に見えた。母が近づこうとして足を早めると不意に横から自転車が、音もせずに二人の前を突切ったりする。

「ええ、危ないねえ」

母は両手で私の肩を、痛い程強く押えて、立止まるのだった。藍ねずみのお召なぞの母の着物は、膝にも胸にも、清心丹の匂いがした。母と私とを認めると膝掛けを脱いだ番の車夫が、直ぐに立上って来た。

「団子坂の上の上った所まで行ってお呉れ」

母はそう言って先に乗り、私を車夫の手から膝の上へ受取るのだった。車夫は火を点けた提灯をガバガバとのばして梶棒に引っ掛け、梶棒をあげると両肱を張り、背中を押し伏せられたように前へ曲げて走り出した。「はい、はい」と嗄れた声で言いながら、足を後へ跳ね上げ、一生懸命に走って行く。

雨の降る日は上野の森も、不忍の池の面も無数の水の針で蔽われ、空は暗くて屋根や木々、鋪道なぞに落ちる水の音が空にもあたりにも立て籠めている。山下から本郷台までの谷間の町の、押並んだ屋根の下を幾度か道を曲って、ぴちゃぴちゃと泥水を跳ね上げながら車夫は走って行く。幌に嵌った硝子板には水の滴が光り、町の灯が薄赤くにじんでは消える。

家に入ると、千駄木の家も雨の音に蔽われていた。林のような木立に囲まれている千駄木の家の雨は、家全体が烈しい音に閉じ込められるのだった。鬱蒼とした緑の木々の梢を籠めて、庭中に鳴る雨の音を聴きながら、二人は奥の部屋へ入った。母は手早く普段着に着かえると、箪笥のそばへ行き、金色の鍵を出して箪笥の抽出しを開けた。細く尖った音を立てて軋みながら、ガッタンガッタンと、揺れるようにして抽出しが開くと、母は黄ばんだ象牙の箱を出して、細い指から指輪を抜き、中へ入れて蓋をすると直ぐに抽出しに蔵い、ガチャリと鍵を廻すのだった。濃い水色の地に、同じ薄色で縞のある糸織りの着物は、動くたびにシュウシュウ音がして、つんとした母の顔や様子に纏わるように、優しかった。ガチャリと閉まる鍵の音を聴くと、寝ころびながら母を見ている私は「ああ面白かったなあ、面白いことはもう済んで終った……」と、思うのだった。母は金色の鍵を懐へ深く差し込むようにしまうと、一寸庭

の方を見てから何か用ありげに台所の方へ行くのだった。白い足袋の裏が、庭の明りを映して光っている廊下を障子の蔭に、隠れた。

千駄木の家は広くて東から西へ、幾度も曲っては続く廊下に沿って、幾つもの部屋が並んでいる、鉤なりの細長い家だった。南側は冬でも青い葉が空を蔽っている常磐木の庭、北側は花樹と草花の庭で夏は花で埋まり、野分が吹くと、庭一杯の花や茎が雨の飛沫の中で重い音をたてて、揺れた。廊下の東の端は、父の居間の六畳、その部屋から西へ寝る部屋、茶の間と続いてそこから廊下は南へ曲った。曲ると一段低くなった一間幅の広い廊下になり、廊下の右側は硝子窓、左側は洋室で、あった。再び細くなった廊下は角の四畳半から西へ折れ、次の六畳の角から広い廊下に平行して北に曲り、六畳を廻った廊下は再び東に折れ曲って洋室の西の扉口に、出た。ここがこの家を貫く長い廊下の終りであった。角の部屋と廊下を距てて表玄関と三畳の小部屋が並び、武家屋敷風の大きな玄関から敷石づたいに表門が、あった。この大きな門は、「見晴らし」と言われていた崖の上の細い道に向って、開かれていた。其処に立つと上野の森との間に遮るものがなく、薄水色に霞む低い、遠い甍の波が上野の森まで、続いていた。表門の塀の際に母屋と離れた二階建ての土蔵があり、冷たい、厚い石を上って中へ入ると、黴の匂いがし、埃っぽい床にも棚にも、本や雑誌が積み重なっていて、梯子を立て掛けたような階段を登ると天井の低い二階も同じように本の山で、南側の小さな窓から僅かの明りが、差し込んでいた。

父の部屋の北隣りに花の庭に面した明るい六畳があり、寝る部屋、茶の間などと平行して三畳の小部屋、裏玄関、台所が続き、裏玄関は茶の間と背中合せになっていた。裏玄関から飛石伝いに団子坂通りに向って開いた、格子戸を嵌めただけの裏門があり、飛石の左側が四つ目垣を距てて花の庭、右は建仁寺垣を堺に台所の前の空地で、其処には物置と裏門に並んだ別当（馬丁）の住居、続いて二つの馬小屋があった。家の北側は、海津質店、物集家、生薬屋、八百屋等が左から、洋室、台所、三畳は右からと、左右から切り込んだ凸凹の空地になっていて、物集家との堺には大きな無花果の樹があり、見上げると青い葉が空を蔽っていた。茶の間と洋室とで鉤になった一角に、母屋から離れて小さな湯殿があり、洋室に向いた側には細い板を並べた窓があって冬でも簾が、下っていた。南の茶庭は長く続いた垣根を距てて殆んど家の半面を巡っている酒井（子爵）家と隣り合い、西は花畑とこれも垣根を距てて野村酒店に隣り合っていた。洋室から表玄関に出る廊下の左側に、二階へ上る階段の真暗な入口があり、二階は十畳の一間で、この部屋を北から西へ廻る廊下の行きどまりの壁には小さな窓があった。二階に燈火が点った時など父の居間から見

ると、この窓の燈火は林のような木々の梢の間に、望楼の燈火のように見え隠れした。

馬小屋の前の空地には、白木蓮、酒井家との堺には乙女椿、銀杏があり、どれも大きな木で春が来たり、秋になったりすると幼い私が見上げる空の中に、薄桃色や白に輝き、又は金色の鳥のようにキラキラしたりしてやがて春の温い地面や、乾いた秋の敷石を蔽って散り重なり、私のいつまでいても飽きない楽しい遊び場と、なるのだった。

長い廊下の南に沿い、折れ曲りながら続いている硝子戸には青い木立や石燈籠、いろいろな形の庭石なぞがどこまで行っても、映っていた。硝子戸は冬は冷たく、白々とした木立を映し、春は暗い青空を映して、曇っていた。風が吹く日には、北側の部屋部屋にも嵌っている硝子戸と一緒に、家中の硝子戸がガタガタと鳴って、その揺ぶるような音はどこのお部屋に居ても、響いているのだった。夏の雨、秋の風、沢山の硝子戸は小さな私に四季の季節のうつりかわりを見せて呉れる、どこへ行ってもある透った光る、窓だった。

家の中を貫き、曲っては続くこの廊下を私はよく馳け出して、遊んだ。とん、とんと廊下を踏み鳴らしながら、父の居間の前から始めて幾度か曲り、洋室の扉口まで馳けてゆき又戻って来る。それを繰り返して私は一人で、遊んでいた。洋室の手前の暗い上り口へ行くと、大人にも急な梯子段がついていた。上下の五六段の他は、三角形の段が扇をつぼめかけたような形に紆っていて、螺旋のようにさえ見える急な階段である。幼い私が登って行く真暗な下から、「まりちゃん危いよ……」という祖母の声がする事もあったが、知らない顔をして私は一段一段と、登った。登り切ると俄に明るい廊下に、出た。そうしていつも白い空が頭の上一杯に、拡がっているのだった。

ふと思い出して二階へ上って見ると上田敏さんが父と話をしていることもある。無地お召の着物に暗い緑の角帯を締めて、きちんと坐り、鋭い三角の眼が子供のように無邪気な笑いを、湛えていた。浅黒い笑い顔と、鈍く光る金歯と、黒ずんだ緑の帯とが美しい調和をしていた。二人の間には、独逸の葉巻の箱が蓋を開けて置かれ、静かな、明るい笑い声と、葉巻の匂いとの漂う座敷は、水色に霞んだ低い、遠い、上野の森の見晴らしに向って開け放たれていた。足音をききつけて廊下に出て見ると、梯子段の下から母の顔が見え、直ぐに両手に捧げるように持っている紅いお盆と、淡あおい玉露がかすかに揺れている茶碗とが出て来た。紅いお盆を敷居際に置き、母は繊い手でお茶を勧めるのだった。時には不律を抱いた母が現れることも、あった。ほっそりした普段着の胸に大切そうに抱かれた赤子は、薄黄色い小さな顔に微かな笑いを、浮べている。柔かな髪に蔽われた頭は赤子にしては、大きかった。母が、不律の顔を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook